２０２３年6月４日　礼拝説教要旨
詩編講解説教１５０「ハレルヤコーラス」
詩編１５０：１～6、コロサイ３：１６～１７

詩編が成立した時代は、概ねバビロニア捕囚以後、捕囚民たちが帰還して神殿を再建した後の時代と考えられています。バビロニアからペルシャ、アレクサンドロス大王の支配、またエジプトやシリアの支配に入ります。捕囚を解かれたとは言え、イスラエルはそのような様々な大国の支配になお翻弄され続けます。詩編は最後ハレルヤ（主を賛美せよ）と歌いますが、それは晴れ晴れとした気持ちで「ハレルヤ」と歌ったのではありません。むしろ厳しい状況の中で、それでも彼らは歌うことをやめなかった。この悲しみを、苦しみを、怒りを歌に乗せて、それでも歌い続けました。

第１５０編には「角笛」「琴」「竪琴」「太鼓」「シンバル」など様々な楽器が登場してきます。しかも「太鼓に合わせて踊りながら」ですから、とても賑やかな様子を想像します。例えば詩編の表題に「伴奏付き」とか「指揮者によって」という表題が付いていることがあります。それは詩編が楽団の伴奏に合わせて歌うものだったことを示しています。その曲に乗せて、節をつけて神さまの御業を歌うのです。人は一人だと沈黙してしまいます。怒りや悲しみに支配されてしまいます。だからこそ歌い続けたのかもしれません。

また歌は人間の記憶と結びつきます。懐かしい歌を聴くとその頃を思い出すでしょう。イスラエルも歌うことで神さまの御業を思い出しました。「力強い御業のゆえに」（２節）とあります。この「力強い御業」と聞いて人々はそこで何を思い出したのでしょうか。それは天地創造の御業であり、海を分けた出エジプトの御業であり、そしてイスラエルを捕囚から解放してくださった御業です。天地をお造りになられた神さまがイスラエルをエジプトから、バビロニアから救い出し、約束の地へ連れ帰ってくださった。それを歌うことで、神さまの救いを思い出し、困難を耐えたのではないでしょうか。

詩編の最後の言葉は６節「息あるものはこぞって、主を賛美せよ。ハレルヤ」（６節）です。ここに詩編の目的とあると同時に、わたしたち人間の目的があります。この「息」は人間の創造で「土の塵に命の息を吹き入れられた」（創世記２：７）その「命の息」のことです。人間は神さまから命の息を吹き入れられた存在です。その息あるものは全て主を賛美せよと言います。それが人間の生きる存在理由、目的です。そのように人間は神さまを賛美するために造られました。この息を神さまを賛美するために用いるのです。しかしその創造の目的から外れてしまった。神さまをほめたたえるのではなく、自分の栄光、自己栄化のために生きるようになる。息の使い方を間違えた。それが人間の罪です。

けれども神さまはこのような人間を見捨てずに、その創造の目的に適うように整え導いてくださいます。先週はペンテコステを祝いました。聖霊はまさに命の息です。聖霊がわたしたちをキリストに導き、その創造の目的に適うように新しく造りかえてくださる。ヨハネ福音書ではよみがえりの主イエスが弟子たちに息を吹きかけて「聖霊を受けよ」（２０：２２）と言われるところがあります。聖霊がわたしたちをイエス・キリストの十字架とよみがえりの御業にあずからせて、罪を赦し、神の子として新しく造りかえてくださるのです。そして正しく息を用いて生きることができるようにしてくださいました。そこにキリストの救いがあります。

教会はこのコロナの三年を耐えて、徐々に本来の教会の歩みを取り戻しつつあります。コロナ禍の一番大きな痛手は賛美を歌えなくなったことでした。歌わなくなったことで、わたしたちは本当に歌えなくなりました。息が続かなくなりました。歌は息を意識させるのです。腹式呼吸、お腹を使って歌っているか。そこにもイスラエルが歌うことをやめなかった理由があるように思います。歌うことで息を意識したのです。

最近、改めて思いを込めながら歌う讃美歌があります。『こどもさんびか』に入っている歌ですが「どんなときでも」という讃美歌です。

どんなときでも　どんなときでも
苦しみに負けず　くじけてはならない
イエスさまの　イエスさまの愛を信じて
どんなときでも　どんなときでも
幸せをのぞみ　くじけてはならない
イエスさまの　イエスさまの愛があるから

保育園の卒園式でこの歌を歌います。これから子どもたちが出て行く世界、様々な困難があるけれども希望を持って生きていってほしいという願いを込めて歌います。

この讃美歌の作曲をした高浪晋一さんのお話を聞いたことがあります。歌詞を書いた高橋順子さんは小児癌で苦しい闘病生活の中、この詩を書きました。そして８歳で神さまの御許に召されました。けれどもその幼い魂の中にイエス・キリストの命の息が宿り、その創造の目的である賛美を生み出しました。いつの時代もそのようにして命の息は人を生かし賛美の歌声を響かせました。ヘンデルの「ハレルヤコーラス」も高橋順子さんの「どんなときでも」も、そのようにして人は命の息を宿し力強い神さまの御業を歌い続けていくのです。これからも歌い続けていくでしょう。わたしたちもその一人です。

天の父よ。あなたは嘆きに代えて賛美の衣をまとわせてくださいます。どうぞ命の息をもってわたしたちの口にあなたの御業を讃える賛美の歌を歌わせてください。そのためにキリストの救いに導いてください。キリストのゆえにどのような時も神さまの救いを信じて希望を持ち続けることができますように。ここに詩編の御言葉を読み終えます。今日まであなたが御言葉を持ってわたしたちと共に歩んでくださったことを感謝いたします。どうぞこの御言葉がわたしたちの糧となりますように。主の御名によって祈ります。アーメン。